

日本の学校に在学する日系ブラジル人生徒のエスニックアイデンティティと家庭生活環境、帰国体験との関連

田中詩子 (お茶の水女子大学大学院博士後期課程)

要約

本研究は、日本の学校に在学する日系ブラジル人生徒のエスニックアイデンティティはどのようなもので、家庭生活環境、帰国体験および属性とどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。予備調査として半構造化インタビューを実施後、質問紙調査を愛知県で行った。得られた155名の回答を分析した結果、エスニックアイデンティティについて、『ブラジル人的アイデンティティ』、『統合アイデンティティ』、『周辺化アイデンティティ』、『日本人的アイデンティティ』の4因子が抽出された。また、エスニックアイデンティティと家庭生活環境、帰国体験および属性との関連については、『ブラジル人的アイデンティティ』に『家庭内ブラジル文化志向』、『交友のブラジル人志向』、帰国体験の『ブラジル同調型』、「来日年齢」が正の影響、『統合アイデンティティ』に『家庭内二文化共存志向』、『交友のブラジル人志向』、「滞日年数」が正の影響、『日本人的アイデンティティ』に『家庭内ブラジル文化志向』が負の影響、『家庭内二文化共存志向』と「滞日年数」が正の影響を与えていることが示された。

キーワード：日系ブラジル人生徒 エスニックアイデンティティ 二元的文化化
エスニック集団への帰属意識 帰国体験

1. 問題の所在と研究目的

1990年に出入国管理及び難民認定法が改正され、日系ブラジル人の就労目的での来日が急増した。当初、その多くは単身で短期の予定の来日であったが、次第に滞日が長期化し、家族を呼び寄せる、来日後結婚するなどして日系ブラジル人の子どもが増加していった。法務省によると、2013年6月における14歳以下のブラジル国籍の在留外国人数は33,259人で、国別(出身地別)では中国に次いで2番目に多い。また、日本に居住する日系ブラジル人家族の多くは、外的な要因に影響され具体的な将来の計画が立てられずに滞在が長期化していることが指摘されている(関口, 2003; イシカワ, 2005; 兎島, 2006)。そのため、日系ブラジル人の子どもは、自分の将来の人生設計や未来像を描くことが困難な状況にあるという(関口, 2003)。そのような中で、子どもたちはアイデンティティ確立という青年期の発達課題(エリクソン, 2011)に立ち向かわなければならず、さらに、周りの環境により日常的にエスニシティを意識せざるを得ない(関口, 2003)。したがって、アイデンティティの一側面であるエスニックアイデンティティの形成が、子ども自身の自己を確立させるための枠組みにとって重要な意味を持つことが考えられる(原, 1995)。

エスニックアイデンティティの概念について、De Vos (1975)は「自集団の文化の何らかの側面を、自分なりの判断によって、その文化を象徴するものとし

て捉え、それを共有する者に対して一体感を持ち、それによって自集団を他集団から区別しようとする感情である」としている(江淵, 1994)。また、辻本(1998)は「エスニック集団への所属感と、それにとまなう評価と感情」であるという。個人は幼児期からの文化化の過程で自集団、あるいはエスニック集団の文化を習得し、それを集団の成員と共有しつつ、集団の一員であるという意識を獲得していくと考えられる(江淵, 1994)。エスニック集団への所属感に関する日系ブラジル人の子どもの文化化については、自分の所属するエスニック集団の文化伝承の場としての家庭と、ホスト社会文化の体系的な学びの場としての学校を基本構造とした二元的文化化の環境であると指摘されている(関口, 2003)。江淵(1994)によれば、二元的文化化とは二つの異なる文化の相互作用による人間形成にかかわる過程で、異文化適応における文化化と捉えられるという。

このような二つの文化の狭間にある人々の異文化適応を類型化したものに、Berry (1997)の異文化受容態度の類型モデルがある。このモデルでは、自文化のアイデンティティと特徴を重要だと考え維持することと、ホスト集団と接触してその文化を受容することとの関係に基づき、その程度の高低により「統合(integration)」、「同化(assimilation)」、「分離(separation)」、「周辺化(marginalization)」の4タイプが提示されている。日系ブラジル人の子どもの場合、上述のように、家庭生活で育まれるエスニック集団へ

の所属感と、学校をはじめとする日本社会への同化の度合いが問題となる。そこで、本研究では日系ブラジル人生徒のエスニックアイデンティティの全体像を捉えるため、Berry (1997) の類型モデルを参照することとする。

二元的文化化の環境にある日系ブラジル人の子どもについて、光長・田淵 (2002) は、日本の学校ではほとんどの子どもが自らのアイデンティティを維持することが困難な「同化」や、外見上の明らかな違いにより集団から排除されうる「境界化」の状態に置かれていると指摘している。また、詳細なエスノグラフィック・リサーチにより子どもたちの能動性に着目した森田 (2004) は、3名の日系ブラジル人児童が民族的アイデンティティを損なうことなく日本の学校に異文化適応したプロセスを描写している。このように、学校での適応に関する研究においては、アイデンティティとの関連について検討されてきている。一方、ブラジル文化伝承の場である家庭の文化に関する研究は寡少である。井上 (2006) は、子どもは親から受け継がれる家庭の文化よりもむしろ空気を吸うように日本の社会の影響を受けているとしている。しかしながら、家庭の文化がアイデンティティ形成に与える影響について検討している研究はほとんど見られない。

江淵 (1994) は、二元的文化化におけるエスニック集団への帰属意識の成立要因として、自集団の成員だけが共有するという「共有感情」をあげており、個人の観点からは「自分はどこからきたのか」という「ルーツ」に関する事柄であるという。箕浦 (1984) は、アメリカ在住の日本人の子どもが日本へ一時帰国して以来、日本人であると認めるようになった事例について述べ、帰国は自分の「根っこ」がどこにあるのか認識させるのに役立つとしている。辻本 (1998) は、新しい他者との出会い、あるいは帰国や移住による社会的文脈の変化がエスニックアイデンティティ形成に影響することを指摘している。このような研究から、日本に居住する日系ブラジル人の子どもが家族とともにブラジルへ帰国し、ブラジル文化に直接触れブラジルの家族と交流することは、自分のルーツに気づく、あるいはエスニック集団への帰属意識を強める体験となると考えられる。しかし、日系ブラジル人の子どものブラジルへの帰国に関する研究は寡少である上に、ほとんどの研究はアイデンティティの問題にまで関心が及んでいないのが現状である (光長・田淵, 2002)。

さらに、子どものアイデンティティ形成について、属性などの要因に注目した研究も見られる。アメリカ在住の日本人の子どもを対象に調査を行った箕浦 (1984) は、文化的同化の過程に最も深く関与しているのは移動年齢や滞在年数などの発達に関係の深い要因と、アメリカ文化の伝達者であるアメリカ人の同輩集団との交流であるとしている。関口 (2003)

も、1990年代半ばに日系ブラジル人の子どもを対象にフィールド調査を行い、来日年齢が低いほど滞日年数が長いほど日本人化が進むとしており、日本人の友達との交流密度による影響も示唆している。現在、関口 (2003) の調査からは20年近く経ち滞日の長期化も見られる。そこで、アイデンティティ確立という青年期の発達課題 (エリクソン, 2011) を抱える日系ブラジル人生徒のエスニックアイデンティティ形成について、現状を検討する必要があると考える。

以上を踏まえ、本研究の目的は日本の中学校および高等学校に在学する日系ブラジル人生徒を対象とし、生徒のエスニックアイデンティティはどのようなものか (研究1)、生徒の家庭生活環境はどのようなものか (研究2)、生徒の帰国体験はどのようなものか (研究3)、生徒のエスニックアイデンティティは家庭生活環境、帰国体験および属性とどのような関連があるか (研究4) とする。

2. 研究方法

2.1 質問紙の作成

予備調査は、2011年2月から3月に、日本の中学校と高等学校に在学経験のある日系ブラジル人9名を対象に半構造化インタビューを行った。インタビューは文字化しKJ法 (川喜田, 1967) により分析した。その後、本調査の質問紙作成を行った。エスニックアイデンティティについて問う36項目は、劉 (2001) および許 (2008) の中国朝鮮族のエスニックアイデンティティに関する質問項目を参照し、Berry (1997) の異文化受容態度の4類型に基づき作成した。家庭生活環境について問う20項目は、予備調査のインタビューの結果に基づき、学校以外の生活環境に関する内容をBerryの4類型に照らし作成した。さらに、ブラジルに帰国し滞在していたときの体験内容を問う16項目は、予備調査のインタビューの結果に基づき作成した。

2.2 調査手続きおよび調査対象者

2011年7月から9月に、愛知県の中学校、高等学校に在学する日系ブラジル人生徒を対象に質問紙調査を行った。調査の実施に際し、中学校9校と高等学校6校、ブラジル人教会6か所、NPO団体の支援教室1教室の協力が得られた。質問紙は206部配布し166名から回答を得た (回収率81%)。著しく回答に不備があるものを除き155名の回答を分析の対象とした。

調査対象者の内訳は、男性82名、女性73名、中学生96名、高校生59名、国籍はブラジル126名、日本11名、二重国籍16名、無回答2名で、出生国はブラジル82名、日本72名、無回答1名である。滞日年数は138名が6年以上で、93名に帰国経験があった。

3. 結果

3.1 生徒のエスニックアイデンティティの因子分析結果（研究1）

日系ブラジル人生徒のエスニックアイデンティティはどのようなものであるかを把握するため、155名の回答に基づき因子分析を行った。主因子法を用いて固有値、累積寄与率などから因子数を決定し、プロマックス回転を行った。因子負荷量が低い(.35以下)項目、複数の因子に負荷量が高い項目を除外した結果、4つの因子が抽出された(表1)。累積寄与率は40.356%であった。さらに、各因子の内的整合性を確認するため信頼性係数を算出した。

第1因子は「いつも自分がブラジル人であることを意識して行動する」「ブラジルの習慣をよく知っている」などの6項目からなり、ブラジル人としての認知、行動、情動を表す内容であると考えられることから、『ブラジル人的アイデンティティ』と命名した。第2因子は「自分がブラジル人でもあり、日本人でもあることを誇りに思う」「いつも自分がブラジル人でもあり、日本人でもあることを意識して行動する」などの3項目からなり、いずれもブラジル人であるという意識と日本人であるという意識を併せ持っていると考えられる内容であることから、『統合アイデンティティ』と命名した。第3因子は「自分はブラジル人でもなく、日本人でもないと思う」「自分がブラジル人でもなく、日本人でもないことに何も感じない」の2項目からなり、ブラジル人であるという意識も日本人であるという意識も持っておらず、エスニックアイデンティティに対する認識が低いことがうかがえる。そこで、『周辺化アイデンティティ』と命名した。第4因子は「日本の習慣をよく知っている」「スポーツの試合では日本を応援する」などの4項目からなり、日本人としての認知、行動、情動を表す内容であると考えられることから、『日

本人的アイデンティティ』と命名した。このように、日系ブラジル人生徒のエスニックアイデンティティは4因子構造であることが示された。これはBerry(1997)の4類型に相当する結果であると言えよう。

3.2 生徒の家庭生活環境の因子分析結果（研究2）

日系ブラジル人生徒の家庭生活環境はどのようなものであるかを把握するため、3.1と同様に因子分析を行った。その結果、3つの因子が抽出され、累積寄与率は33.851%であった。さらに、各因子の内的整合性を確認するため信頼性係数を算出した。

第1因子は「親はあなたがブラジル人であると言う」などの3項目と「親はあなたが日本人であると言う」などの逆転項目2項目からなり、家庭で親は子どもにブラジル人としての意識をもつように望んでおり、ブラジル文化が重視されていると考えられる内容である。そこで、『家庭内ブラジル文化志向』と命名した。第2因子は「放課後や週末はいつもブラジル人の友達と遊ぶ」と逆転項目「放課後や週末はいつも日本人の友達と遊ぶ」の2項目からなり、学校以外の生活の場での交友関係がブラジル人の友達中心であると考えられる内容であることから、『交友のブラジル人志向』と命名した。第3因子は「家庭ではブラジル料理も日本料理もどちらも同じくらい食べている」「親はあなたがブラジル人でもあり、日本人でもあると言う」などの4項目からなり、家庭にはブラジル文化と日本文化が共存し両文化ともに重視されていると考えられる内容である。そこで、『家庭内二文化共存志向』と命名した。各因子のクロンバックの α 係数は、第1因子=.615、第2因子=.587、第3因子=.544であった。

3.3 生徒の帰国体験の因子分析結果（研究3）

日系ブラジル人生徒の帰国体験はどのようなものであるかを把握するため、ブラジルへの帰国経験がある93名の回答に基づき、3.1と同様に因子分析を行った。その結果、2つの因子が抽出され、累積寄与率は38.628%であった。各因子の内的整合性を確認するため信頼性係数を算出した。

第1因子は「周りの人と積極的にポルトガル語で話した」「ブラジルの子どもたちと同じような遊び方をした」などの4項目からなり、いずれも生徒自身がブラジル滞在中にブラジルの生活に積極的に参加し、ブラジル人と同様の行動をしていたと考えられる内容であることから、『ブラジル同調型』と命名した。第2因子は「いろいろな

表1：日系ブラジル人生徒のエスニックアイデンティティの因子分析結果

質問項目	F1	F2	F3	F4
第1因子 ブラジル人的アイデンティティ ($\alpha=.793$)				
いつも自分がブラジル人であることを意識して行動する	.700	.127	.118	-.036
ブラジルの習慣をよく知っている	.689	-.110	.196	-.011
自分はブラジル人だと思う	.660	.023	-.156	.120
家庭の中ではできるだけポルトガル語を使っている	.626	-.033	.081	.056
自分がブラジル人であることを誇りに思う	.583	.062	-.082	-.004
スポーツの試合ではブラジルを応援する	.390	-.025	-.201	-.197
第2因子 統合アイデンティティ ($\alpha=.707$)				
自分がブラジル人でもあり、日本人でもあることを誇りに思う	.146	.715	-.189	-.024
いつも自分がブラジル人でもあり、日本人でもあることを意識して行動する	.149	.662	.029	-.028
自分はブラジル人でもあり、日本人でもあると思う	-.258	.623	.068	-.078
第3因子 周辺化アイデンティティ ($\alpha=.543$)				
自分はブラジル人でもなく、日本人でもないと思う	.097	.041	.792	.050
自分がブラジル人でもなく、日本人でもないことに何も感じない	.023	-.067	.568	-.137
第4因子 日本的アイデンティティ ($\alpha=.593$)				
日本の習慣をよく知っている	.133	-.167	-.150	.719
スポーツの試合では日本を応援する	-.069	-.008	.042	.490
家庭の中では日本の習慣に従って行動する	-.298	.126	-.047	.382
自分が日本人であることを誇りに思う	.005	.290	.174	.356
因子相関行列	F1	-	-.349	-.473
	F2		-	-.051
	F3			-
	F4			-

ブラジル料理を作ったり、食べたりした」「親戚と一緒に遊びに行ったり、旅行に行ったりした」などの3項目からなり、ブラジル滞在中は家族や親戚と行動を共にしていたことがうかがえる。そこで、『共行動型』と命名した。各因子のクロンバックの α 係数は、第1因子 = .659、第2因子 = .580であった。

3.4 エスニックアイデンティティ形成の影響要因 (研究4)

まず、日系ブラジル人生徒のエスニックアイデンティティ4因子に属性の影響があるか調べた。t検定の結果、男女間および中学生、高校生間に有意な差は認められなかった。また、相関分析の結果、来日年齢と滞日年数については相関が認められたが、年齢については相関が見られなかった。以上の結果を踏まえ、エスニックアイデンティティに家庭生活環境、帰国体験および属性はどのように影響しているか検討するため、エスニックアイデンティティ4因子を従属変数、家庭生活環境3因子、帰国体験2因子および相関が認められた属性(「来日年齢」「滞日年数」)を独立変数として重回帰分析を行った(表2)。その結果、以下のエスニックアイデンティティ3因子に有意な影響が示された。

『ブラジル人的アイデンティティ』には『家庭内ブラジル文化志向』、『交友のブラジル人志向』、『ブラジル同調型』、「来日年齢」が正の影響を与えていることが示された。これは、「来日年齢」が高く、『家庭内ブラジル文化志向』、『交友のブラジル人志向』で、帰国体験が『ブラジル同調型』である生徒は『ブラジル人的アイデンティティ』を形成していると説明できる。

『統合アイデンティティ』には『交友のブラジル人志向』、『家庭内二文化共存志向』、「滞日年数」が正の影響を与えていることが示された。これは、「滞日年数」が長く、『家庭内二文化共存志向』、『交友のブラジル人志向』である生徒は『統合アイデンティティ』を形成していると説明できる。

『日本人アイデンティティ』には『家庭内ブラジル文化志向』が負の影響、『家庭内二文化共存志向』と「滞日年数」が正の影響を与えていることが示された。これは、「滞日年数」が長く、『家庭内ブラジル文化志向』ではなく『家庭内二文化共存志向』である生

徒は『日本人アイデンティティ』を形成していると説明できる。

4. 考察と今後の課題

以上の分析結果について、エスニックアイデンティティの因子ごとに考察を行う。まず、『ブラジル人的アイデンティティ』には『家庭内ブラジル文化志向』、『交友のブラジル人志向』、『ブラジル同調型』、「来日年齢」が正の影響を与えていることが示された。「来日年齢」が高い生徒はある程度のポルトガル語を習得してからの来日となり、ブラジルでの記憶を維持していると思われる。加えて、日本の二元的文化化の環境で生徒たちが『ブラジル人的アイデンティティ』を維持するためには、『家庭内ブラジル文化志向』が大きな支えとなっていると考えられる。また、先行研究ではホスト社会の同輩集団との交流が文化的同化に影響するとされているが(箕浦, 1984; 関口, 2003)、本研究では、同じ団地や教会などのブラジル人の友達との親密な交流を表す『交友のブラジル人志向』が、『ブラジル人的アイデンティティ』形成の影響要因として示された。同じルーツを持つブラジル人の友達への仲間意識がエスニック集団への帰属意識を強めていることが考えられる。このような生徒が学校でもブラジル人生徒とのみ交流しポルトガル語使用が日常化している場合、Berry (1997) の類型モデルの「分離」に近い状況になることが推測できる。しかし、予備調査のインタビューでは「部活をがんばって楽しかった」、「学校で仲のいい日本人の友達がいる」などと語り、森田(2004)が指摘するように、民族的アイデンティティを損なわず追加的に日本の学校に適応している様子も見られた。今後は、エスニックアイデンティティ形成と適応の関連を質的分析により詳細に検討する必要がある。さらに、本研究の知見としては、『ブラジル同調型』帰国体験が『ブラジル人的アイデンティティ』形成の影響要因であること、つまりブラジル滞在中にブラジルの人々と積極的に交流し自らブラジルの生活や文化に深くかかわる体験は、ブラジル人であるという意識を促す、あるいは強めるということが示された。一方、家族の帰国に随伴する旅行のような『共行動型』帰国体験は影響要因とは認められなかった。ここから

表2: エスニックアイデンティティを従属変数、家庭生活環境・帰国体験・属性を独立変数とした重回帰分析の結果

	ブラジル人的 アイデンティティ	統合 アイデンティティ	周辺化 アイデンティティ	日本人 アイデンティティ
家庭内ブラジル文化志向	.410***	-.128	-.255	-.288*
交友のブラジル人志向	.297**	.303**	-.074	-.152
家庭内二文化共存志向	.059	.376**	.229	.238*
ブラジル同調型	.291*	.196	.172	-.023
共行動型	-.067	-.069	.123	.163
来日年齢	.210*	-.057	-.188	-.085
滞日年数	.008	.321*	.035	.272*
重決定係数(R^2)	.459***	.303**	.148	.254*

表中の数値は標準偏回帰係数(β)

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

は、帰国がルーツへの気づき、あるいはエスニック集団への帰属意識につながる体験となるためには、生徒の内発的な動機づけが必要であることが考えられる。予備調査のインタビューでは「ブラジルのニュースなどで、小さいときから親にブラジルをすごく意識させられた」などの語りがあり、ルーツを伝承しようとする親の意識がブラジル滞在中の生徒の内発的な動機づけに影響していることが推察される。

次に、『統合アイデンティティ』には『家庭内二文化共存志向』、『交友のブラジル人志向』、「滞日年数」が正の影響を与えていることが示された。二元的文化化の環境にある日系ブラジル人生徒は「滞日年数」が長いほど日本人化が進むとされているが(関口, 2003)、本研究では、「滞日年数」の長い生徒が『交友のブラジル人志向』の影響により、『統合アイデンティティ』を形成していることが示された。滞日長期化の中で日本の文化や社会の強い影響力を受けながらも、ブラジル人の同輩集団に対する仲間意識がエスニック集団への帰属意識を強め、それがブラジル人としての意識を促していると推察される。予備調査のインタビューでは、日本語のみによるブラジル人の友達との交流も語られており、必ずしもポルトガル語使用が重要ではないことがうかがえる。同輩集団との交流は、言語などの明示的な事柄がなくとも「ルーツ」に関する「共有感情」(江瀬, 1994)をもたらしとされる。

さらに、『日本人アイデンティティ』には『家庭内ブラジル文化志向』が負の影響、『家庭内二文化共存志向』と「滞日年数」が正の影響を与えていることが示された。「滞日年数」が長い生徒の中には日本生まれ、あるいは幼少期に來日した生徒が多いと考えられる。そのため、家庭内が二文化的環境であったとしても、ブラジル文化が強く意識されるよう積極的な環境作りが行われていない場合、文化化の環境は日本社会に包摂され、生徒は圧倒的な日本文化の影響を受けることになると推察される。本研究では、関口(2003)が指摘した「滞日年数」のみならず、家庭がブラジル文化伝承の場として機能していないことが『日本人アイデンティティ』形成に影響することが示唆された。

最後に、『周辺化アイデンティティ』に影響を与える要因が認められなかった背景として、今回の調査地が日系ブラジル人のコミュニティや教会が充実した集住地域であったため、生徒の家族関係や友人関係が比較的安定していたことが考えられる。しかし、『周辺化アイデンティティ』を形成している生徒は、家庭の文化的環境についていずれの認識も持っていないことが示されたとも捉えられ、家庭の文化的環境の曖昧さや生徒の認識の低さが関連していることが推察される。また、本研究ではアイデンティティ確立の発達課題(エリクソン, 2011)を抱える中学生と高校生が対象者であることから、『周辺化アイデンティティ』を

形成している生徒はこれからの発達段階において自我の危機に直面する、あるいは現在直面している可能性がある。そのため、生徒が自我の危機を乗り越え成長していける、家庭生活環境をはじめとする成育環境とはどのようなものであるか検討することが重要な課題となる。今後は質問項目を再検討し、中学生、高校生を別々に分析する必要がある。質的研究も取り入れ詳細なアイデンティティ形成の様相を検討したい。

謝辞

本論文の執筆に際しご指導いただきましたお茶の水女子大学加賀美常美代教授、調査にご協力いただきました各関係機関の皆様と日系ブラジル人生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。

参考文献

- Berry, J. W. (1997) "Immigration, Acculturation, and Adaptation." *Applied Psychology: An International Review*, Vol.46, No.1, London: Applied Psychology, 5-34.
- De Vos, G. A. & Romanucci-Rosa, L. (1975) *Ethnic Identity: Cultural Continuities and Change*, Palo Alto: Mayfield Publishing Company.
- 江瀬一公 (1994) 『異文化間教育学序説- 移民・在留民の比較教育民族誌的分析-』九州大学出版会。
- エリック・H・エリクソン (2011) 『アイデンティティとライフサイクル』西平直・中島由恵訳, 誠信書房。
- 原裕視 (1995) 「異文化接触とアイデンティティ」異文化間教育学会編『異文化間教育』第9号, 異文化間教育学会, 4-18.
- 法務省 (2013) 『在留外国人統計統計表』 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html (2014.1.11 閲覧)
- 井上孝代 (2006) 「異文化接触と第一世代・第二世代- 身体 (からだ) とところとコミュニティ-」異文化間教育学会編『異文化間教育』第24号, 異文化間教育学会, 63-75.
- イシカワ・エウニセ・アケミ (2005) 「家族は子どもの教育にどうかかわるか- 出稼ぎ型ライフスタイルと親の悩み」宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育- 不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会, 77-96.
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法- 創造性開発のために』中央公論社。
- 児島明 (2006) 『ニューカマーの子どもと学校文化- 日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房。
- 許太玲 (2008) 「中国朝鮮族エスニックアイデンティティの形成要因について- 中国東北部の大学生を中心に-」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科修士論文。
- 箕浦康子 (1984) 『子供の異文化体験- 人格形成過程の心理人類学的研究』思索社。
- 光長功人・田淵五十生 (2002) 「ブラジル人の子どもたちは、どのようにアイデンティティを変容させるのか?- 帰国後の再適応を観察して-」奈良教育大学編『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』第51巻第1号, 奈良教育大学, 1-17.
- 森田京子 (2004) 「アイデンティティ・ポリティクスとサバイバル戦略- 在日ブラジル人児童のエスのグラフィー-」日本質的心理学会編『質的心理学研究』第3号, 日本質的心理学会, 6-27.
- 劉京宰 (2001) 「中国朝鮮族のエスニック・アイデンティティに関する研究」名古屋大学大学院国際開発研究科編『国際開発研究フォーラム』第17号, 名古屋大学, 155-186.
- 関口知子 (2003) 『在日日系ブラジル人の子どもたち- 異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店。
- 辻本昌弘 (1998) 「文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程: 南米日系移住地から日本への移民労働者の事例研究」日本社会心理学会編『社会心理学研究』第14巻第1号, 日本社会心理学会, 1-11.